

特集



しらたかの夏を告げる

半夏一輪咲き



紅花生産日本一、日本の紅（あか）をつくる町、白鷹町の夏は、半夏生から始まる。夏至から数えて11日目、半夏生の頃、広い広い紅花畑に、ぼつんと小さな紅花が花を咲かせる。そこから次々と花が咲き、一週間もすれば一面に紅花が咲きそろう。

咲いた紅花は、黄色い花の中に赤が三分ほどになったときが摘み頃で、一輪一輪手摘みされる。紅花摘みは、葉が夜露に濡れて、まだ柔かい朝方に行われ、町内あちらこちらの紅花畑では、夜明け前から紅花を摘む光景が見られ、これもまた白鷹町の夏の風物詩である。



日本の紅をつくる技

紅花の花の色は黄色。紅花の色素の99%が黄色。残りのたった1%が紅（赤色）の色素。その1%の紅の色素を抽出して本紅や染料の原料になる紅餅などに加工する。

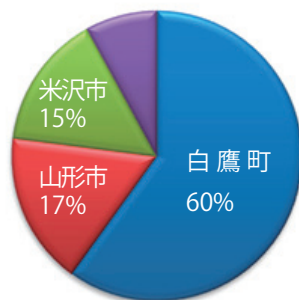
摘んだ花弁は、水洗いし、よく揉みながら黄色い色素を洗い流す。紅餅づくりは、荒振り、中振り、揚振り、花ねせなどの工程を経て発酵させ、十分に発酵した花弁を餅のように丸め、でつく。3cm程の団子状に丸め、煎餅状につぶし、表裏を返しながら天日干しをする。ようやく紅餅の完成だ。紅餅一枚約3.75g、一匁。「花いちもんめ」



今野正明さん（十王）・右から2人目



平成26年度
紅花生産量



山形県紅花生産組合連合会発表